EAPEA ニュースレター

2023 年 6 月 1 日
第 13 号

発行元：NPO 法人 **東アジア政経アカデミー**
発行元連絡先：〒168-0082 東京都杉並区久我山 4-38-14 電話：03-3332-8481 FAX：03-3332-8433
URL：http://www.eapea.sakura.ne.jp/ e-mail：shnagano@d8.dion.ne.jp

この号の内容

1 冒頭の言葉
■NPO 法人解散に際して
（永野慎一郎）
2 会員からの便り①
■東アジア政経アカデミーと私
（渡部 茂）
■アジアの平和と「半導体有事」
（貫隆夫）
3 会員からの便り②
■韓国再訪
（水上洋一郎）
■私の木浦
（薄葉 威士）
4 活動報告
■主要活動年表
編集後記

NPO 法人解散に際して

東アジア政経アカデミー代表 永野慎一郎

ニュースレター第 13 号が最終号になることを考えると寂しさを禁じ得ません。2010 年に大学を定年退職し、新しい仕事として取り組んだのが NPO 法人東アジア政経アカデミーでした。40 余年間の大学での経験や学者として蓄積した知識を活用し、社会貢献できる分野として考えたのが東アジア地域の国際交流であり、なかでも韓国との交流でありました。

その一環として、学術交流としては、韓国統一研究院と早稲田大学韓国学研究所などと共同で日韓政策フォーラム（10 回）を主催しました。また、上海国際問題研究院、沖縄国際大学、台湾逢甲大学、大東文化大学経済研究所、韓国木浦大学などと協力して、相互訪問しながら東アジア国際フォーラム（5 回）を開催しました。東アジア国際フォーラムは現役時代、東アジア地域の学術機関の交流のために、東京、上海、ソウル、台湾、沖縄の 5 地域の研究機関が持ち回りで東アジア国際シンポジウム（13 回）を開催したもので、当時としては意義のある相互訪問による交流でした。その時、参加していた主要メンバーが定年退職になったことから、その延長線として始めたのが東アジア国際フォーラムです。

民間交流や行政機関同士の交流を推進しました。韓国全羅南道木浦市と東京都板橋区との交流です。木浦市長はじめ木浦市訪問団が 3 度にわたり板橋区（坂本健区長）を訪問し、区内の産業施設などを視察しました。また、板橋区の福祉関係の学者が木浦訪問し、日・韓福祉国際セミナーを開催しました。さらに、板橋区福祉部と板橋区社会福祉協議会は、日本人女性田内千鶴子が木浦で「共生園」という孤児院を創設し、3000 人の戦争孤児を養育したという話の日韓合作映画「愛の黙示録」を板橋区立文化会館において上演しました。本アカデミーの企画によるものです。

そのような縁で、本アカデミーは木浦市の協力を得て、板橋区関係者のみならず、中央日韓協会や東京日韓親善協会連合会などの木浦訪問もサポートしました。そして明治期の外交官で木浦領事を務めた若松兎三郎が陸地棉という新しい棉種を木浦高下島で試作・成功し、かつ彼のその後の努力によって陸地棉が朝鮮半島全地域に普及した結果、韓国の棉産業は大きく飛躍したのですが、その若松兎三郎の功績を称える活動も行いました。

一方では、韓国の前・元の国会議員たちによる組織である大韓民国憲政会と日本の国会議員たちとの交流の橋渡し役をしてきました。現在、日韓関係は順調に進行しているとは言えません。隣国として共に必要としていることはいうまでもない事実です。目先の利益を追求するのではなく、将来に向けて、お互いに認め合い、理解し合い、協力することが真の国益になるものと考えております。

日韓関係だけでなく、中国も含めて、東アジア地域の平和と安定を維持するために、共存共栄の体制作りが重要であると考えております。そのためには信頼関係の構築、その前提として交流が必要です。次の世代に何を遺すべきか、私たちの世代の責務でもあります。

最後に、本アカデミー設立以来、協力して下さった役員および会員の皆様に心から感謝申し上げます。

2019 年 10 月 24 日 東京新宿。東アジア国際フォーラム参加者たち

2023 年 5 月 15 日 ソウル市内のレストラン。憲政会会長らと会食

会員からの便り①

東アジア政経アカデミーと私

元大東文化大学長　渡部　茂

　およそこの世に生を受けたものであるならば、人間をはじめとする動植物であれ、会社や大学といった組織であれ、必ずいつかは死に直面することになります。2010 年に設立され、さまざまな活動を通して多くの地域、大学、研究所、研究者などに大きな功績を残した NPO 法人「東アジア政経アカデミー」も、代表の永野先生をはじめとする理事や会員の皆さんの多大な奮闘にもかかわらず、コロナ禍などの要因により活動が抑えられてきたために、大変残念なことではありますが、2023 年 6 月に死（解散）を迎えることになりました。とはいえ、それは単なる死ではなく、新たな生につながる死であります。組織は消滅いたしますが、その魂やそこから得られました知見、情報、絆などはその組織に所属していた人々の中でその人々の生ある限り生き続けることになるでしょう。

　私もこのアカデミーの存在により、沢山の思い出と共に、さまざまなことを学び、多くの知己を得ました。特に、アカデミーの主要な活動の一つであります東アジア国際フォーラムでは、報告者、パネリスト、コーディネーターなどとして参加させていただき、会員の皆さまはもとより、大東文化大学、沖縄国際大学、台湾、韓国、さらには中国の研究者の方々との交流を通して、多くの知識、情報、経験を得ると共に、沢山の人々と大切な絆を結ぶことができました。さらに、忘れることのできないさまざまな楽しい思い出を残すことができました。とりわけ、韓国の木浦でのフォーラムに参加されました研究者の皆さんとの種々の交流、沖縄国際大学での報告と質疑応答や食事会で研究者の皆さんの間で交わされたやり取り、台湾での国際フォーラムの後に行われた夕食会場で見た夜景の美しさ、コーディネーターとして参加しました大東文化大学のフォーラムで交わされました活発な議論と急激な天候悪化によるフォーラムの切り上げ等々、の体験はかけがえのない貴重なものとなっており、後期高齢者となって記憶も定かではなくなってきました私にとりましても、今なお鮮明な思い出として脈々と息づいております。

　改めまして、この東アジア政経アカデミーに参加させていただき、多くの知見と知己を得ると共に楽しい数々の思い出を残すことができましたことに深く感謝いたします。

アジアの平和と「半導体有事」

武蔵大学名誉教授　貫　隆夫

　1980 年代に入って「21 世紀はアジアの時代」と言われるようになった。実際、アジア諸国の GNP 合計は 1990 年から 30 年間の間に世界で 4 分の 1 から 3 分の 1 のシェアを占めるまでになったが、その主要な原因としてはこの間の中国の目覚ましい経済的発展を挙げることができる。しかし、残念なことに、中国の経済的発展が中国の政治体制の民主化をもたらすとの期待が裏切られたとして、アメリカの対応が硬化したことから、米中摩擦、延いては米中冷戦の時代を迎えるに至っている。湯之上隆氏は近著『半導体有事』文芸新書（2023 年 3 月刊）において、戦前の日本が米国による石油禁輸に追い込まれて太平洋戦争に突入したように、今や石油以上に不可欠な半導体について中国封じ込めが進行しており、台湾有事、米中衝突のリスクが大きくなっている、と主張している。

　私自身は湯之上氏が危惧する米中衝突＝台湾有事のリスクは杞憂に終わる可能性が高いと考えている。その根拠は以下の 4 つである。①中国は宇宙開発ロケット打ち上げに見られるように自前の技術力に自信を深めており、米国側の封じ込めを克服する実力を持っている。戦前の日本のように自国の石油備蓄が枯渇する前に開戦しなければという焦りはない。②もともと時間軸の長い国家戦略を得意とする中国が、まだ戦力において米国に劣る現段階で武力行使に踏み切るはずがない。中国の戦力が米国を上回る時期を辛抱強く待つはずである。③ロシアによるウクライナ侵攻がもたらしたロシアの国際的孤立を見れば、たとえ軍事的勝算が見込めるとしても、欧米をはじめ世界を市場とする貿易依存度の高い中国が戦争を始めることはあり得ない。中国の富裕層には海外の口座に資金を保有する者も多く、口座凍結を恐れる彼らは軍事的手段の使用に強く反対するはずである。④台湾から中国への直接投資だけでなく中国と台湾の間には米国が窺い知れない太い人脈があり、中台双方にとって経済的損害の大きな(中国による)台湾侵攻を避ける水面下の調整が十分可能である。

　上記の楽観論に対して以下の再反論が想定される。①ウクライナ侵攻直前まで専門家を含めてその可能性を否定する声が圧倒的に大きかった。にもかかわらず侵攻は始まり今も続いている。政治家の野望は経済合理性を駆逐することがある。独裁権力を持つ習近平氏にそれが起こらないとは断言できない。②中国から仕掛けないとしても、中国がアメリカを凌駕する軍事力を持つ前に叩いて潰すというアメリカの戦略から戦争の契機となる何らかの仕掛けがアメリカによって行われるかもしれない。③米中ともに（ジニ係数の増大に示される）国内の所得階層間の格差が増大しており、国内の社会的分断・緊張が高まっている。中国の農民工・大卒者ともに就職状況が厳しさを増しており、経済状況がさらに悪化すると国内の緊張緩和のために対外的緊張が意識的に設定され、その歯止めが効かなくなる恐れがある。

　台湾有事が勃発するか否かは措くとして、北朝鮮問題を含めて「アジアの時代」は経済ブロック化を超えて「アジアの戦争」というリスクを警戒すべき状況となっている。これまで経験してきた戦争の惨禍を踏まえた「アジアの叡智」に期待したい。

会員からの便り②

韓国再訪

公益財団法人日韓文化協会顧問　水上　洋一郎

コロナ規制が緩まったこともあって昨年の秋以来、2 回韓国を訪問した。

一つは、木浦で行われた「国連世界孤児の日」制定推進大会と田内千鶴子生誕 110 年記念式に参加するためであった。田内千鶴子（韓国名　尹鶴子）は夫尹致浩とともに共生園を立ち上げ、韓国孤児 2000 人を育てたことで知られている。日本で老人ホームなどを運営する「こころの家族」の創立者尹基さんが日本からの参加者一同を率いた。

10 月 28 日、大会当日は空は晴れわたり、秋にしてはとても暖い日であった。推進委員会の日本側代表、阿部志郎会長は、令嬢代読の「願望の文」のなかで、冒頭、日本が韓国・朝鮮半島でおかした罪について、力で侵略したこと、同化政策を強要したことを明確に述べ、次いで愛と共生について語った。真摯に歴史に向き合い、未来に対して誠実な言葉が発せられた。それにしても、日本の内や外はすべてが今だけをやり過ごしているように見える。

もう一つは、4 月 16 日に韓国の小学校の同窓会に 4 年ぶりに出席したことである。私は日本生まれの日本育ちで、これには**いきさつ**がある。実は、私の父は植民地時代、慶尚南道で小学校の教師をしていた。父は日本に帰国後、私が小学 6 年生の時に亡くなったが、その後父をよく知っていたある韓国小学校の卒業生から我が家に手紙が届いた。随分、後のことになるが、1996 年の夏、私は初めて通訳を兼ねた在日コリアンの友人の助けもあってこの小学校の同窓会に出席した。在日コリアンの友人は、後に韓国民団の事務総長となった河政男さん。以来、そうこうするうちに、蔚山(ウルサン)広域市の田舎にある三同(サムドム)小学校という名のこの学校の同窓会特別会員にさせられてしまった。父が奉職した小学校との縁をとりもち、その小学校を案内して下さった朴在彦氏は鬼籍に入られて 10 数年になる。今回で 18 回目の出席となった。以前は私より年長の方が数名ほど列席、今年はコロナのゆえか私が一番の年長者となり淋しい限りであったが、皆のすすめで歌や踊りの輪に加わった。旧知の同窓会生は近くの名刹、通度(トンド)寺などを案内してくれた。

この小学校の同窓生たちは、同門のロッテの創業者辛格浩（重光武雄）や日本で阪本紡績を起こし、韓国大使館の土地や建物を寄付した、当地出身の徐甲虎を誇りにしている。

私はコロナ以前はこの同窓会出席という渡韓の機会を利用してソウルにある建国大学、梨花女子大学、高麗大学などで日韓交流や相互理解について講演や講義をしていた。今後どうするか思案中である。

私の木浦

東アジア政経アカデミー理事　薄葉　威士

「木浦では　東北東の風　風力 3　曇り　気圧 1025 ミリバール」、私が小学生のころ（1950 年代中ごろ）、木浦とはどこにあるのか、日本の地名なのかそうでないのか皆目わからず、ただラジオの気象通報を聞いていた。木浦についてはその程度の認識だった。

私が韓国に留学ならぬ“遊学”していた際（2004-2007 年）の下宿の近所、ソウル地下鉄 6 号線の安岩駅（高麗大学裏門）の喫茶店に入り浸っているとき、その店でアルバイトをしていた若い女性と言葉を交わすようになった。その女性の実家は木浦でも当時としては多少名の通った日本料理店（刺身屋）で、そこに招待されたのが木浦との繋がりのそもそもである。“この日本人なら特段の害はなさそうだ”と値踏みされたのだろう。木浦のお店（彼女の実家）に招待され、えらく歓待された。高級そうな料理もたくさんご馳走になったが、そこで韓国人の金粉に対する感覚を始めて知った。

金粉酒というのは知っていたし飲んだこともあったが、刺身に金粉が振りかけられて出てきたのには驚いた。金粉をどかして食べるのか、そのまま一緒に食べるのか……。歓迎の証しだということは後で知った。

その後、永野先生のご指導もあり、木浦は何度も訪問した。木浦近代歴史館の女性館長さん、旧松島神社に当時お住まいだった方、何で知り合ったか思い出せないあのアジョシ等々。当時私の所属していた中央日韓協会の研修旅行のときなどは、永野先生のおかげで木浦市を挙げての歓待を受けた。

その他諸々、行くたびに、今度は何をしよう、だれと会おうという思いがいや増しになってきたが、今でも私の胸を締めつけているのは前述の若い女性だ。事情はよくわからないが、木浦のお店はほどなくして休業・閉店になり、お母様も亡くなられたとか。

彼女は敬虔なクリスチャンで、ソウル市内でのデート(？)の際もアルコールは一切ダメ。63 ビル展望レストランで夜景を眺める際もアルコール抜き。そして何をするにも、まず神様にお祈りをして許し(？)を請うてからでないと物事が始まらない。その間は、信仰心皆無の私は何をしていいかわからず、ただボケッとしているのみ。2008 年に帰国してからも、韓国に行くたびに呼び出してはいたが、当時 30 歳近くの若い女性と 60 歳も半ば過ぎの“じいさん”では、さすがにだんだんと疎遠になり現在に至っている次第。

木浦旧市内の、倉庫になっていた旧教会は今どうなっているだろうか。木浦近代歴史館筋向いの日本式家屋の喫茶店は今もあるのだろうか。その他気になることは多々あるが、件の女性はもう 40 歳代半ばになっているだろう。ぜひ会いたいと思う反面、“もうそれはないだろう”というのが大人としての分別か。

「木浦では　ほろ苦い風　やや強し　気分は薄曇り　気圧やや高め」

活動報告

主要活動年表

2010	5 月 20 日	NPO 法人東アジア政経アカデミー設立
	9 月 29 日	第 3 回日韓政策フォーラム、韓国統一研究院と共同主催（大東文化大学法科大学院）
2011	1 月 28 日	永野慎一郎代表、いたばし政策塾公開講座で「韓国の政治文化と地方自治」と題して講演
	2 月 10 日	日韓合作映画「愛の黙示録」上映（板橋区立文化会館）、板橋区福祉部と板橋区社会福祉協議会主催
	5 月 25 日	第 4 回日韓政策フォーラム、韓国統一研究院と共同主催（大東文化大学法科大学院）
	9 月 21~25 日	東アジア政経アカデミーと日本・木浦交流ネットワーク訪問団木浦訪問
	10 月 25 日	鄭鍾得木浦市長・裵鍾凡市議会議長など東京都板橋区長（坂本健氏）訪問
	11 月 3 日	中央日韓協会と木浦市協力、木浦圏海洋観光発展に関する国際セミナー開催（木浦）
2012	3 月 26 日	木浦福祉財団と共同主催、日・韓福祉国際セミナー開催（木浦）
	10 月 2 日	木浦市立交響楽団の東京オペラシティコンサートホールで公演
	11 月 6 日	第 5 回日韓政策フォーラム、早稲田大学、韓国統一研究院と共同主催（早稲田大学）
2013	3 月 14 日	第 6 回日韓政策フォーラム、早稲田大学、韓国統一研究院と共同主催（早稲田大学）
	4 月 20 日	石塚輝雄前板橋区長招待講演（大東文化会館）
	12 月 3 日	第 7 回日韓政策フォーラム、早稲田大学、韓国統一研究院と共同主催（早稲田大学）
2015	7 月 3 日	第 8 回日韓政策フォーラム、早稲田大学、韓国統一研究院と共同主催（早稲田大学）
	12 月 7 日	第 9 回日韓政策フォーラム、早稲田大学、韓国統一研究院と共同主催（早稲田大学）
2016	10 月 17 日	朴洪律木浦市長東京訪問団、板橋区表敬訪問、歓迎会開催
2017	3 月 13～14	東アジア国際フォーラム in OKINAWA 参加（沖縄国際大学）
	7 月 21 日	第 10 回日韓政策フォーラム、早稲田大学、韓国統一研究院と共同主催（早稲田大学）
	10 月 25 日	永野慎一郎『明治期外交官・若松兎三郎の生涯』刊行（明石書店）
	11 月 3 日	東アジア国際フォーラム上海会議参加（上海国際問題研究院）
2018	3 月 30 日	東アジア国際フォーラム台中会議参加（台湾逢甲大学）
	5 月 10 日	「東アジア・ローカリゼーション国際フォーラム木浦会議」開催（木浦）
2019	4 月 12 日	日中韓 3 国協力 20 周年記念討論会（北京）永野慎一郎参加
	8 月 8 日	日韓友好促進合同セミナー推進（自民党外交調査会と韓国憲政会共同主催）自民党国会議員 24 名、韓国元国会議員 24 名参加
	10 月 25 日	東アジア国際フォーラム東京会議、大東文化大学経済研究所と共同主催（大東文化大学）
2021	5 月 2 2 日	『ある北朝鮮テロリストの生と死』羅鍾一著・永野慎一郎訳、集英社新書
2023	4 月 26 日	『アジア人物史』第 11 巻（集英社）世界戦争の惨禍を超えて　第 1 章「韓国財閥」永野慎一郎執筆

■編集後記

歳月が流れるのは本当に早く、NPO 法人東アジア政経アカデミー(EAPEA）が発足してもう 13 年を迎えることになりました。2010 年発足時に永野先生が「10 年位やれたら良いな」とおっしゃっていたのを昨日のように思い出すのですが、気付けば 13 年、3 年ほどのコロナ禍があったにもかかわらず、組織として維持できたのは、永野先生の多大なご尽力があってこそであったと思います。永野先生をはじめ、この組織を支えて下さった先生方にあらためて厚くお礼申し上げると同時に、日韓関係をはじめ国際情勢について学ぶ機会を与えて下さったことに深く感謝しております。

そして今回は最終号ということもありまして、多くの先生方から貴重な御玉稿をお寄せ頂きました。誠に有難うございました。確かに EAPEA はこれを以て解散しますが、ここで育まれた日韓の絆は今後次世代にも間違いなく引き継がれていくことでしょう。永野先生をはじめ、お世話になった先生方の今後のご健勝を心からお祈り致しております（大杉由香）